

Tattvasaṃgraha における分量批判

菱 田 邦 男

Tattvasaṃgraha (以下 TS と略称) の guṇa-padārtha-parikṣā においては、勝論学派の説く分量論に対して仏教の立場から批判がなされている。本稿ではその分量批判について、主として注釈の説にしたがって検討したい。

TS では、批判に先だつて反対派の分量論を紹介する。それによると、分量 (parimāṇa) は計量観念・表現の原因である。ある対象に関して、「大きい」という観念が生じたり、或は「長い」という表現がなされるのは、dravya (実体) であるその対象に分量という guṇa (属性) が依存しているからである。分量には、大 (mahat)・微小 (aṇu)・長 (dīrgha)・短 (hrasva) の4種がある。このうち、大には常住なるものと無常なるものとの2種がある。常住なる大は虚空・時間・方角・アートマンという唯一常住な dravya に存する。無常なる大は三原子体 (try-aṇuka) 以上の複合体の dravya に存する。我々にとつて知覚可能なのは三原子体以上である。微小にも常住なるものと無常なるものがある。常住なるものは単独原子 (paramāṇu) とマナスに存し、球体である。最小不可分の dravya である原子とマナスは常住であるため、それらに存する微小も常住である。無常なる微小は二原子体 (dvy-aṇuka) にのみ存する。

「大きい」「小さい」等の表現は比喩的 (bhākta) に用いられることがある。実際には大きなものが、他のもつと大なるものに比して分量が劣るならば、「それは他のものに比して小さい」と言われる。勝論説においては、大・長という分量は三原子体以上の dravya に存するから、我々によつて日常知覚されるものはすべて大なるものか又は長いものである。故に、知覚され得るすべてのものに対して「大きい」「長い」という表現がなされなければならない。では、日常知覚されるものに関して、「小さい」と表現されるのは何故か。本質的には大きなものが他のもつと大きなものと比較された場合に、それは「小さい」と表現されるからである。この表現は本質的なものではなく、比喩的なものである。

次に、三原子体等に依存する大と長との相違、二原子体に依存する微小と短との相違に関して疑問が提出される。長いものと大きなもの、短いものと小さなものとの間に一体区別があるのか、という疑問である。第一の問いに対しては、

例えば、「大きなものの中から長いものを持参せよ」とか「長いものの中から大きなものを持参せよ」という表現の区別が日常経験されるから、大と長はそれぞれ別である、というのが答えである。表現の区別が日常生活の中で有効であるのは、表現の対象に区別があるからだ、というのである。第二の問いに対しても、第一の場合と同じ趣旨の答えが得られるはずであるが、二原子体における微小と短の相違はヨーガ行者によつてのみ知覚される (647, G. O. S. 版)。以上のように、TS によつて反対派の分量論が紹介されているが、この紹介内容は Praśastapāda-bhāṣya (PBh と略称) の説と一致する¹⁾。

さて、このような分量に対して仏教側は批判の矢を向ける。「大等とは色等とは別なものとして確立される。色等の観念とは異なつた観念の対象であるから。例えば楽等の如し」という反対派の見解に対して仏教側は、我々の感官知に色等とは異なる大等という分量が顕現することは経験されないから、反対派の挙げる理由は成り立たない、と反駁する。大きなものに関して、現量知の表象として現われるのは色とか手触りなどであつて、大という分量ではないのである。次に、仏教側は大等の観念を分別知 (vikalpikā) とみなして議論を進める。「大きい」等の観念が色等の観念とは異なるにせよ、「色等の観念とは異なる観念の対象であるから」という理由は承認できない。最高真理 (paramārtha) の立場では、「大きい」等の観念に対応する如何なる対象も存在しない。それらの観念は言語表現を伴う (sābhijalpa) からである。最高真理の立場では、言語表現を伴うものは真実在ではなく、したがつて、「大きい」という分別知は実在としての大きなものに対応してはいない。「大きい」等の分別知が色等の観念とは異なるものであるにせよ、真実在とは無関係なところでの区別に過ぎないので、上記の理由は大等の実在性を立証する決め手にはならない、と仏教側は反論する。

では、「大きい」等の観念は如何にして生ずるのか。仏教側によれば、同一方向等に発生している色等が知覚される場合に、その色等とは異なつた色等からの区別を明示するために、慣例の社会的約束 (samaya) に従つて、「大きい」等の観念が生ずるという。つまり、同一状態にある色等が一定の観点から捉えられ、その色等の範囲などが問題になる場合に、「大きい」「長い」等の表現が生ずる。それらの表現は慣例の社会的約束に従つて用いられるが、その約束は客観的実在に対応して必然的に定められたものではなくて、便宜上任意に定められたものである。更に仏教側は、分量に対する批判は色等に対して行われた批判と同じ論法、即ち色は単一体であるかどうかという問題点を通して可能であると言う (647)。

勝論説によれば、部分の集合体である全体 (avayavin) という dravya は単一にして不可分であるから、それに依存する guṇa も当然単一にして不可分である。この見解に対して仏教側は、guṇa である青色が単一にして不可であるならば、青色の一部が知覚されるだけで青色全体が知覚されることになってしまう。例えば竹の細い割れ目から射し込む細い光線によつて瓶のほんの一部が照らされただけで、瓶の青色全体が照らされることになってしまうという不合理が生ずる (636-637)。この場合の青色を分量に置き換えて批判することができる、と言うのである。分量という guṇa の存在を認めない仏教側は更に次のような反論を加える。

宮殿の並び (prasāda-mālā) を認識すると、「大きい」「長い」という観念が生起することは経験されるが、その観念に対応する大・長の分量が実在することは承認されない。言い換えれば、反対派が想定している大・長の分量が無くても、宮殿の並びに関して「大きい」「長い」という観念は生ずる。仏教側にすれば、宮殿の並びが「大きい」「長い」という観念の原因なのである。そこで、次のような弁明が予想される。宮殿には並びという guṇa が和合しており、その同じ宮殿に大・長の guṇa も和合している。その大・長の guṇa が和合しているからこそ、その並びが「大きい」「長い」と表現されるのである。弁明によると、並び (mālā) は家々に和合する guṇa である。

これに対して仏教側は、その弁明内容は反対派の自説と撞着するから、「家並みは何クロージャ (句盧舍) ある」というような主張は不可能になる、と反論する (648-649)。撞着するわけを仏教側はこう説明する。家というものは有分たる dravya ではない。何故なら、種類を異にした様々な dravya から成る複合単一体としての dravya は存在し得ないからである。家は木材等の合 (saṃyoga) である。合は分離可能な結合関係を实在視したものであり、guṇa の一種である。宮殿が合であるとするならば、宮殿には guṇa である分量は存しないはずである。反対派の説には、guṇa は guṇa を有しないという原則があるからである。更に、宮殿には並びという別な guṇa も存し得ないから、「宮殿の並び」という表現も不可能になり、結局、「並びは大きい」等の表現もあり得ないことになる。

「並びは jāti (=sāmānya) である」という弁明も予想される。jāti は六句義の一つであり、普遍或は種を实在視したものである。それは多くの事物の中に存在する共通の本性を包括したものである。例えば、個々の牛は牛 (go) にのみ共通な本性、即ち牛性 (gotva) という jāti を具えており、牛はその jāti によつて牛以

外のものから区別され、「牛」と称せられる。jāti は自己の基体の名称を決定する。jāti は dravya・guṇa・karman (運動) に存在するので、並びが jāti として guṇa である宮殿に依存することは可能である。

これに対して仏教側は次のように反論する。jāti は自己の関係する基体のすべてに存在するから、jāti である並びは宮殿の一つ一つに関わっており、したがって単独の宮殿でも「並び」と称せられることになるという不合理が生ずる。一本一本の樹木 (vṛkṣa) が樹木性 (vṛkṣatva) という jāti と結びつくことによつて「樹木」と呼ばれる場合と同じになる。更に、宮殿の並びが多数ある場合、個々の並びが「宮殿の並び」と呼ばれるには、各並びのすべてに「宮殿の並び性」という jāti が和合していなければならない。ところが、並びが jāti であるとするれば、jāti であるその並びに対して更に「並び性」という jāti が和合しているという不合理が生ずる。反対派の説では、jāti には jāti は存しないからである。

このように、「宮殿の並び」「並びは大きい」等の観念・表現が成立することは不可能になつてしまうわけであるが、ここで次の弁明が予想される。並び等に関する「大きい」等の観念は実物を対象とする本質的観念 (mukhya-pratyaya) ではなくて、比喩的観念 (upacāra) である、と。この弁明に対して仏教側は、並び等に関する「大きい」等の観念は決して比喩的なものではない。何故なら、それらの観念は錯覚ではなくて、実物を対象とする観念と変りないものであるからだ、と反論する (650)。仏教側の立場では、例えば山に関して「大きい」という観念が生じた場合、その観念は実物である山に対応して誤りなく生じたものであるから、決して比喩的なものではない。家並みに関する「大きい」という観念も、山が大きいという観念と同様に誤謬なく生じたものである。

ところで、宮殿の並びに関する議論は終始 Pramāṇavārttika (PV と略称) の説に従つて進められている。仏教側はこの議論の3か所において PV から引用し、議論の最後を PV の言葉で締括り、批判を根拠づけている。家並み論争に関しては、PV の見解が全面的に継承され、それより新しい点は見られないと言えよう²⁾。

1) PBh (Vizianagram Sanskrit Series vol. 4, Benares 1895) pp. 130-132.

2) TS. 650 注釈に PV, II (現量章)—155 下段～157 からの引用文が示されている。なお、Pramāṇavārttika of Acharya Dharmakīrti, with the commentary 'Vṛtti' of Acharya Manorathanandin, Bauddha Bharati Series-3, Varanasi 1968 及び戸崎宏正博士『仏教認識論の研究』—法称著『プラマナーナ・ヴァールティカ』の現量論一、上巻 (大東出版社、昭和54) pp. 250-256 を参照。(愛知教育大学教授)